

日本語指導に向けての誤用分析

——助詞を中心に——

栗山昌子

1. はじめに

学習者が目標言語を習得していく過程では必ず誤用が生じる。言い換えれば、学習者は誤用の段階を踏みながら目標言語に近づいていくのであるが、この時期は学習過程で非常に重要な段階である。この段階に学習者は自己の誤りに気がつき自ら訂正したり、あるいは訂正をしてもらいながらより高いレベルへの目標言語習得の道を歩いていくわけである。従って目標言語に到達するまでに学習者が産出する中間言語の段階での適切な助言は言語学習上において重要な効果を持つ。つまり、文中のどの箇所が不自然で誤用とされるのかを指摘し、どうしてそういう誤用が生じたのかという原因の究明を行い、誤用を防ぐために学習者に日本語の規則を十分に納得させることが必要である。この過程は学習者の再度の誤用を防ぐことになるので、この作業を見過ごしたり、怠ったりすると間違いが定着して言語の化石化を招くことになるのである。

本論では、日本語学習者の作文中の誤用を収集し、その分類と分析を行い、日本語学習の効果的な指導の指針とする。従って分析や分類はあくまでも指導のための段階として捉えたい。

2. 研究方法

日本語学習者33名^(注1)の作文を資料とする。学習者は全員中国人で日本語能力試験1級程度の能力で大学の授業を受けている学部学生である。従って初級の文法や文型は既に習得しており、日常会話や自分の意志を通じさせる

には不自由しない程度の作文能力を持っている。しかし、込み入った思想や事柄の詳細な描写になると誤用が目立ち、不自然な表現や理解に苦しむ内容の文を産出する。資料は筆者が担当した日本語の作文のクラスで課題として書かせた作文の中から抜き出した誤用である。課題は自己紹介のような個人的なものから新聞記事を読んでの所見を述べるものと広範囲に渡っている。誤用の種類に関しては、文章構成において個人の独特な表現に問題がある一部のものを除いては個人的な誤用の偏りはあまり見られなかった。誤用文は全部で358例あったが、本論ではその中の助詞に関するもの(3-1)、自動詞・他動詞(3-2)、可能表現(3-3)の3項目の中の86例をあげ、誤用部分には下線を施した。尚、誤用例としてあげた文は学習者の作文の中の一文であり、その文の前後関係を知るためには不十分である。ただ、誤用の検討としてなるべく一文でも判断できる文を抜き出した。

3. 誤用の種類とその分析

誤用の種類は多岐に渡り、誤用自体が互いに重なりあったものも多く、分類は極めて困難であるが、大きく次のように分類した。

表 学習者の誤用の種類と数

| 種 類 | 誤用数 | 種 類 | 誤用数 |
|-----------|-----|---------|-----|
| 助詞 | 70 | 自動詞・他動詞 | 18 |
| 語彙 | 51 | 活用 | 17 |
| 接続詞 | 39 | 可能形 | 11 |
| 文章構成 | 35 | 修飾 | 9 |
| テンス・アスペクト | 25 | その他 | 83 |

もっとも多かったのは助詞の誤用で、その数は70例である。次に語彙の51例には語彙の用法の間違いや適切な語彙を知らないための間違いなど、例えば「単純的な生活」や「理想な人」など「的」のつけ方の間違いなどが含まれている。接続詞に関しては、一般に高度なものを使おうとして前後との繋ぎ具合がうまくいかない場合が多い。文章構成における誤用に関しては何を言わんとするのか理解に苦しみ、訂正が困難なものが多い。特に、本国での

み日本語を学んだ学習者には独特の誤用がみられ、日本で日本語を学んだ学習者との差が大きく現れている。文章構成の誤用35例のうち11例は、前述の個人特有の誤用であるため個人的な指導が必要とされる。例えば次のような例である。

「結婚するかどうかと言うことは、人間の身の回りより自身に大切な選択だから、余計な注目されるのも、余計な関心されるのも必要するわけではないと思う。」^(注2)

表記面では、促音を正しく表記していない場合、例えば「母に似っている」「一位を取て」などがあり、カタカナ語の表記面の誤用では、「インタネット」「ストレス」などがあげられる。また「として、とって、対して、につれて、ために、ように」や「呼応の表現」等が適切に使われていないもの、漢字の間違いなどがある。

初級段階の単文レベルでの作文であれば、誤用も多いが、その箇所も明確に指摘することができ、訂正もしやすく学習者にも分かりやすく説明ができる。しかし、中・上級になれば自分で辞書を引いて得た知識や見聞きした知識も増え、込み入った考えや意見などを産出しようとするため、また、そういう場に置かれる場合も多いため、文も複雑になり、それに伴い誤用も複雑化してくる。もちろん、中には初級レベルの文法や語彙や用法が定着していないために生じる誤用も含まれている。しかし、誤用訂正におけるもう一つの問題は、表面には見えない学習者固有の文化的背景による思考の違いなどに起因する、つまり、言語外条件によるものもあり、判断がしにくく訂正に時間がかかる。

本論では、どのような誤用が見られたか、またそれは何に起因しているのか、どのように訂正して指導していけば効果的かということについて述べる。

3-1. 助詞

学習者の誤用はさまざまであるが、その中でも助詞の問題が一番多い。日本語の文はその構成上、語と語の関係に必ず助詞が関わって意味をなしているから、当然助詞の使用頻度は多く、必然的に誤用も多くみられる。

日本語教育の場合は、国文法における格助詞、副助詞、係助詞などの助詞の分類上の問題ではなく、それぞれの助詞の機能を基盤にした用法に焦点がおかれる。特にその用法を細分化して、具体的な例文を学習者に提示し、間違えやすい助詞の用法を分析することが重要である。

助詞の中でも「は」と「が」の使い分けは学習者にとって最も難解なところである。今回の作文の中でも全員に「は」と「が」の使い分けの混同による誤用が見られ、その数も最も多かった。しかもこの使い分けは単純に訂正のできるものと、そうでないものがある。文の前後関係から「が」ではなんとなくおさまりが悪く不自然であるが、しかし、それは何に起因しているのか明解に説明しがたい場合も多い。「は」と「が」の使い分けを除けば、他の助詞における誤用は一定の規則により正用への説明ができるものばかりである。したがって、まずは「は」と「が」を除く格助詞の「が」「を」「に」「で」の誤用から始める。

3-1-1 格助詞「を」

格助詞「を」の機能には大きく分けて次の3つの類型がある。

①動作や作用の対象をとる動詞の場合。「本を読む」や「電話をかける」など②動作・通過の場所を示す場合。「公園を歩く」や「橋を渡る」など③動作の起点や出発点を表す場合。「バスを降りる」「大学を出る」などである。以下は、本来「を」を使わなければならないのに他の助詞を使っているものである。下線部が本来「を」であるべき助詞の誤用である。

- (1) 日本語の話すこと
- (2) 日本語学校で卒業しました。
- (3) 私に名づけてくれた人は祖父です。
- (4) 両親は子供が産んだ後、いい成長環境と健康の教育が一番大切だと思っている。
- (5) 今たくさんの学者もこの問題が分析している。
- (6) 私の名前は覚えて欲しいです。
- (7) 石で作った動物などが全部はつきり覚えている。

- (8) 家族に世話するのが大変でした。
- (9) 小学校に卒業するまで成績がよかった。
- (10) 今の会社は求職者の専門経験と資格などに重視している。
- (11) 明るい性格を持っている私がどう思っていますか。

(2)と(9)を除いては上述「を」の①動作や作用の働きかけの対象の機能を持つものである。つまり「話す、名付ける、産む、分析する、覚える、世話する、重視する」などは対象をとる他動詞で、助詞の「を」を使わなければならない。(2)(9)は両方とも「卒業する」と言う動詞と「日本語学校」「小学校」との関係は起点を示しており、他に「バスを降りる」や「家を出る」などと同様である。起点を示す「を」の習得は難しく、(2)では日本語学校を場所と理解し、そこで行う事柄であるため「で」を使ったものと見られる。また(9)の「小学校に卒業する」は、起点を示す「を」と帰着点の「に」と誤って使用している。「入学する」は「に」格をとり、「卒業する」は「を」格をとるという助詞の機能の違いを取り違えたための誤用と思われる。

3-1-2 「に」

「に」の機能には、①存在場所を表す。「部屋に机がある」「先生は研究室にいる」②帰着点。「車に乗る」「大学に入学する」③時点。「9時に始まる」「2000年に卒業した」④動作・作用の対象。「友達に会う」⑤動作・作用の起点。「友達に本を借りる」「先生に叱られる」⑦目的「買い物に行く」⑧比較・頻度・割合の基準。「一週間に一度英会話の学校に行く」などがあるが、ただ、これで「に」の機能がすべて説明されるとは言い切れない。

- (12) 大学で勉強することがなりました。
- (13) 日本の文化が非常に興味があります。
- (14) 募集を応じた人はたくさんいました。
- (15) インターネットを依頼になって事件が起こった。
- (16) 学校を通う。

(12)の「ことがなる」は「ことになる」とすべきであるが、これは②帰着点や変化の結果と言う機能面から考えるよりも、初期の段階で学習する形容詞は「美しくなる」、形容動詞は「静かになる」名詞の場合は「雨になる」で、「勉強すること」は名詞句なので「勉強することになる」と導く方が理解しやすいかもしれない。(13)の「興味がある」は上記のいずれにも当てはまりそうにないが、しいて言えば、④の動作・作用の対象で説明される。同じく「募集に応じる」の「に」も④と解釈される。しかし、「興味がある」と「応じる」の2つの語の意味から「に」の機能を見出すのは難しいかも知れない。(15)の「依頼」という語彙は文面では不適當で「依存」の誤用である。「依存する」という動詞の対象として、インターネットがあるわけで、④の機能ということになる。(16)は動作・作用の帰着点で「学校」は「通う」ところの帰着点である。動詞の性質と意味用法を理解して、名詞との関係を考え、助詞の機能を選ぶという作業は、日本語の理解度が完全でない学習者にとっては混乱を招くばかりである。従って日本語教育の場合は、初めから格助詞の機能面から助詞の使い方を導入するのではなく、どの動詞にはどの格助詞が使われるのかを系統的に順を追って提示して定着させる方が良い。つまり、動詞との関係で記憶するように指導する方が効果的である。

3-1-3 「で」

- (17) 田舎に生活したくないので都会に出ました。
- (18) 5月に丸2年になります
- (19) 青島の特産が一番有名なのはビールと言われている。

「で」の機能は①場所②手段③材料など多岐に渡るが、その中でも①の場所の名詞の後について、例えば「図書館で勉強した」「ホールで講演があった」など、そこで行われる動作や作用を表すものが最も多く使われている。初級段階では「図書館に勉強した」など「に」との混同が多く見られるが、中級以上になるとこの類の誤用は少なくなる。ただ「田舎に住む」と(17)のように「田舎に生活する」など「住む」と「生活する」など似通った動詞における助詞の使い分けは難しいようだ。厳密に言えば、「住む」という語はその場所に

定住して存在しているという意味が強く、「生活する」には人の行動面が強調されていると解釈される。前述(2)の「日本語学校で卒業しました」においては「卒業する」という語を行動だとみなしたため「で」を使ったものと思われるが、卒業式という行事を行ったのであれば、「日本語学校で卒業式を行った」と「で」が用いられる。「卒業する」や「入学する」という語彙の意味は人の行動や動作だと解釈されるものではない。(18)は期限や量を表す機能の「で」を使うべきところを時点の「に」と混用した例である。(19)は、「日本の食べ物で何が好きですか」のような範囲を表す「で」を使うべきなのに、「～が一番有名」と後続の「一番」につられて「が」を用いたと考えられる。

3-1-4 「が」

- (20) 太一の気持ちをよく分かります。
- (21) 日本語を全く分からなくて困りました。
- (22) 日本語をあまり分からない。

「が」は、主語を受ける機能の他に「英語が分かる」「車が欲しい」「水が飲みたい」のようにある特定の動詞の対象を指す場合にも使われる。また「テニスができる」のような可能形にも使う。英語の understand や want が目的語をとるために、それに起因する上記例のような誤用が多い。しかし、初級の学習段階で教える文法項目に入っているので、中級段階でのこういう誤用は単純な不注意な間違いと言える。

- (23) ネット心中をなくなったらいいと思う。
- (24) 難しいことをあったら先生に相談するといい。
- (25) 生活の問題などで頭でいっぱいです。
- (26) 欠点を重要じゃないと思います。

上記の(23)～(26)例は「なくなる」「ある」「いっぱい」「重要である」などは日本語教育では「ある」を除いて形容詞としている。「ある」は動詞であるが存在を表す意味では「ない」と対応していると考えられる。「ある」「ない」の

直ぐ前に主語があるときは主語に「が」をつけることが多い。従って上記の例も主語である「ネット心中」「難しいこと」「頭」「欠点」は「が」で受ける。

下記の(27), (28), (29)の例はいずれも「たまる, 普及する, 進歩する」などの自動詞を他動詞と取り違えて「を」を使っていると考えられる。自動詞と他動詞の区別は習得しにくい項目であり, このような誤用については3-2で後述する。(30)は授受表現における作動主の助詞の使い方の混同に起因している。「くれる」「もらう」は同じ行動であるが, 主語の視点が異なる。「くれる」は相手側に視点があり, 「もらう」は話し手に視点がある。従って助詞も「○○がくれる」「○○にもらう」と使い分けがなされるわけで, 「親切な日本人」に視点がおかれた場合には「が」を使い, 私に視点を置く場合には「親切な日本人に応援してもらおう」と「に」を用いる。ただ, (30)の例文では, 相手の好意的な意志でなされた行為には「くれる」が使われるため, 「くれる」の方が正しい使い方である。

(27) ストレスをたまって

(28) インターネットを普及して社会を進歩するとともに

(29) 社会を進歩するとともに

(30) まわりに親切な日本人に応援してくれますから私も頑張れます。

助詞にはそれぞれ機能があり, その機能を知り, 動詞との結びつきを理解することによってある程度の誤用は避けられる。学習者はなぜ自分が間違えたのかということ動詞と助詞との関係から理解すれば, 再度の間違いを防ぐことにもなる。ただ, 「は」と「が」の混用に関しては, 文の前後関係に加えて心情的な面も加わってくるので一概に説明がし難い。

3-1-5 「は」と「が」

3-1-5-1 「が」→「は」

「は」と「が」の問題に関しては多くの論があるが, 本論では学習者の誤用を中心にその分析と誤用をまねいた原因を中心に考察していく。学習者の誤

用の中には「は」を使わなければならないのに「が」を用いた場合と「が」を使うべきなのに「は」を用いた場合の両方がある。誤用では「は」の代わりに「が」を使用した例が圧倒的に多かった。これは、本来「は」が使われるべき状況を学習者が十分に把握できておらず、「は」の機能を十分に理解していないことに起因していると考えられる。

初級の文法教育の中で「は」は、名詞その他の語についてその語を取り立てる助詞であり、主題（トピック）を表すと教える。しかし、文中で何がトピックなのかということは分かりにくい。また「山田は来たが、佐藤はまだ来ない」などのように「は」は対比・対照の意味を持つということも提示する。市川（1997）は、「は」の本来の働きは対比であるが、対比の度合いが一番弱いときに主題となる^(注3)と述べている。つまり、「は」は、主格の部分を取り上げて、他と区別をするという機能をもっており、「は」で取り上げた主題について、その述語において聞き手の知らない情報である性質や状態などを提示すると言うのが一般的な概念である。

- (31) 自分が長女なので、よく友達から「〇ちゃんは大人っぽいですね」と言われます。
- (32) 外国に行ってみたいと思いましたが、自分が料理も洗濯もできないから迷いました。
- (33) 私の性格が男らしいです。
- (34) 自分の人生がたった一回きりのものである。
- (35) 命が短くて貴重なものだと思いますから、できるだけ若いうちに勉強したいです。
- (36) 人間の顔が「千差万別」といわれている。
- (37) 孫文と言う人が子供にもよく知られている。
- (38) ただ、結婚したくない、そういう気持ちがよく分かります。
- (39) そんな人が考えすぎだと思います。
- (40) 若者の心理状態を分析することが難しいと思います。

上記の例(31)の「が」は不適當である。自分のことを主題として述べる場合

には「自分は長女なので」となり、「私」について述べる文では「私」のあとに「は」を用いる。(32)も同じく「自分」と言うものを取り立てて説明するのであるから「自分は料理も洗濯もできないから」となる。同じく(33)は自分の性格を述べている。「私の性格は」か、または「私は……」と初めなければならない。(33)の文中の「男らしい」というのは様態の「らしい」と「ようだ」の用法の間違いで、「男のようです」となる。また「私は性格が男のようです」が最も適切な文であろう。(34)は「自分の人生」についてどういうものであるかという述部部分に話し手の表現意図があり、一般的な真理を表している。従って「人生は」と「は」が使われる。同じく(35)の「命が短くて」も「命というものは……」と、それがどういうものであるか一般的な真理を述べる訳であるから「は」が使われる。つまり、何について述べるかという捉え方になる時には「は」が使われるため、(36)も同様な理由で「が」は誤用である。また、(37)も同じように「孫文という人は」どういう人かと言えば「子供にも知られている」であり、(38)の「結婚したくない」と言う気持ちを取り上げて説明するためには「そういう気持ちは分かる」と「は」が当然用いられることになる。(39)も同様に、前文で言及した内容があり、その中で一つの事柄や人物を取り上げて述べている。同じく(39)も前述した人物を「その人」と取り立てて新たにその人について述べるわけであるから、「そんな人は」と「は」を使うべきである。一般に前文で提示された事柄や人物について述べる場合は常に「は」を使う。これは一般に英語の定冠詞と不定冠詞の使い分けに対比され、以下の例で説明されている。

むかし、むかしあるところにおじいさんとおばあさんがいました。
おじいさんは山に芝刈りに、おばあさんは川に洗濯に行きました。

(40)の例も「若者の心理状態を分析する」ということに関しての評価が述語に述べられている。例えば、「音楽を聴くことは心を癒される」「毎日歩くことは体にいい」など話者の判断を述語にもつ「は」の用法である。森田(1996)は、「は」の述部の内容はいずれも話し手の主観の中で組み立てられた判断である。話し手の主観の責任において下される判断が社会的、伝統的に認めら

れた普遍的なものになると一つの人生真理としてことわざや慣用表現へと発展する^(注4)と述べている。これは(34)、(35)の「人生は一回きりのものである」や「命は短くて貴重なもの」において言えることである。

- (41) 日本人が天津と聞けば甘栗を思い浮かべますが、実は、天津が甘栗の出産地ではありません。
- (42) インターネットが便利だけれども、また他の方法でたくさん友達を作りましょう。
- (43) 中国人は30代40代の方が再婚するのが納得できるが、その時代になって結婚しないのがどうしても納得できないようだ。
- (44) 若い夫婦が経験がなくて、ほとんど我慢できないのです。
- (45) 日本の女性が結婚してから自分のもともとの姓を使わないようになり、夫の姓をつけられることになっているのにはすごく感動しました。

(41)は、日本人を取り立てる意味では、「は」を用い、他と区別する方が話し手の意図するところであろう。これは弱い対比にあたる。「日本人は」と言う場合、「中国人とは違って」と言う潜在的に日本人でない人との対比を意味しているとも考えられる。後続する節も天津は甘栗の産地ではないと「は」で天津を取り立て、他と区別する。また、述部が否定形であることから「は」の方が適切である。(42)は「インターネット」を取り上げて「便利だけれども」と反対の意を続けようとしている。この場合は「インターネットは便利だけれども」としなければ後の文が続かない。対比の意味の「は」に関しては、同じく、(43)も「再婚するのは納得できるが」となる。ただ後続文に関しては「結婚しないのがどうしても納得できないようだ」も可能である。両方とも「は」を使えば、「再婚は納得できるが結婚しないのは納得がいかない」と対比の意味になる。しかし、後続文は「どうしても納得できないようだ」と「どうしても」と「ようだ」の2語によって心情を含んだ文になっているため、前文とレベルが異なっている。従って「が」を使うことによって「結婚しないの」を強調する意が表われる。このように文末や強調の表現などが「は」と「が」の使用を微妙に左右するのである。

(44)の「若い夫婦」の後に「が」を持ってきた場合には、後続の「我慢できない」の主語は若い夫婦なのか話し手なのか曖昧である。若い夫婦は若いためにお互いに我慢できないのであれば、「は」を用いなければならない。「は」は接続詞や接続助詞を超えて文末まで係るからである。連体修飾節や副詞節などの従属節の主語が主文の主語と異なる場合は、従属節の主語を「が」で提示する。しかし(45)においては、「日本の女性」から始まり、「夫の姓をつけられることになっている」で終わる長い文の主語は「日本の女性」で、感動した話し手と異なるので当然「が」が使われるべきである。しかし、何となくおさまりの悪い文になっているのは、述部が長い文の場合は一般に「は」を使う傾向があるということに起因する。(注5)

- (46) 大切な友達を失って、自分がどうなるか分からなくなりました。
- (47) 留学できて自分が大満足です。
- (48) その光景を見て、私が感動しました。
- (49) 私が日本に来てからもう一年たちました。
- (50) 人に断りもなく名まえを付け替えられた経験がないけれど……

(46)は「自分はどうなるか分からなくなりました」と訂正したいところであるが、「自分がどうなるか分からなくなりました」でも間違いではない。しかし、「は」と「が」の場合には多少意味が異なる。「は」の場合は、それに続く内容に焦点があり、「が」の場合はその前にある「私」に焦点がある。(47)、(48)はいずれも「が」を使っているが述部に自分の感情や心情を表す語がくる場合には一般に「が」でなく「は」が使われる。特に自分を取り立てて言わなければならない場合を除いては、述部に心情を表す動詞や形容詞がくる場合は(主語は話者であると分りきっているので)一般に主語を文中に出さないのが普通である。(48)も「私」という主語を出さなくても「感動しました」で十分である。(49)は、「が」でも「は」でもいずれも使える。「が」の場合は前節で区切られ、単に個別の具体的な事実を述べており、「私が日本へ来てから」三年ではなくて一年経ったという時間的なことを述べている。「は」の場合は、私についての説明であり、「私という者は」と述部において「私」の背

景を述べようとする表現意図が汲み取れる。(50)に関しても同じことが言える。「が」の場合は通常の報告文に見られるように新しい情報として主語を選んで述べている。「が」に代わって「は」を使えば、上述したように「けれど」に続く対比の意味が含まれ、次に何か表明しようとする意が汲み取れる。

「は」と「が」に関しては文法的な誤用と言うよりも、むしろ文脈から見て文として話し手がすんなり入っていくか否かということも含め、適切であるか、適切でないかという非常に判断のしにくい点がある。「は」は話し手の気持ちに左右され、話し手がどういう気持ちでその文を表明しているかが窺われる。「は」を使うか「が」を使うか、その判断も人によって異なる場合がある。例えば、「学校が好き」と「学校は好き」について言えば、前者は単に好みを言っているが、後者は対比の意味が含まれているのが明確である。

(51) 生姜が大嫌いなものです。

(52) 天津の物価が安いし、食べ物が美味しくて、週末に北京から買い物に来る人が多いです。

「は」は全体を表し、「が」は部分を現す。上記は「天津は物価が安い」とする方が日本語らしい表現法である。「この部屋は窓が多い」「彼女は目大きい」など「象は鼻が長い」と同じ「～は～が～」の文型であると言えよう。「天津は物価が安いし食べ物も美味しくて」と訂正したい。物価が安いことと食べ物が美味しいことを同等の評価にする場合は「物価も安いし、食べ物も美味しい」と言うこともできる。

上述のように「は」と「が」はどちらでも使える場合があり、特に独立した文では前後関係からの推測ができないので、多少の意味の違いはあるとしても表現の上ではどちらでもよいとせざるを得ない。しかし、一文の中においても、文中での前後関係、修飾語や文末表現に起因して不自然で収まりの悪い文となっている場合がある。例えば「生姜が大嫌い」という独立した文であれば問題はないが、「生姜が大嫌いなものです」という文になれば「生姜

は大嫌いなものです」の方が自然である。これは「～ものです」という文末表現が説明的意味合いを含んでおり、文中の「は」、「が」の決定を左右しているからである。一般に「が」は現場に即した具体的事実を述べる場合に使われる。従って、単に自分のことを事実として述べる場合には「生姜が嫌い」で納まるが、生姜というものを取り上げて述語で説明的に「嫌いなものです」とするには「は」が妥当であろう。

以上をまとめると、先ず、「は」は基本的には主題を表す助詞であるが、では、どういう場合に、どういうものが主題となるのかということは学習者にとって最も習得し難い点である。野田（1996）は主題を持つ文になりやすい述語として次の4点を挙げている。^(注6)

- ① 恒常的な状態を表す述語
- ② 繰り返し起きる動作や出来事を表す述語
- ③ 心の状態を表す述語
- ④ 意思的な動作を表す他動詞

「は」には対比を表す機能があることは前述の通りである。主題を表す働きが薄れて対比的な意味が現れるのであるが、日本語教育では初級段階に「は」の使い方に対比を挙げ「〇〇さんは日本人ですが、△△さんは中国人です」「テニスはするが、ゴルフはしない」などを提示して教える。この対比の「は」に関しては習得しやすらしく今回も誤用としては特に指摘すべきものは見つからなかった。

3-1-5-2 「は」→「が」

- (51) 私は行った中学校で、生徒の中の一人の男の子は私に囲碁のことを聞いた。
- (52) 北朝鮮人は瀋陽の日本大使館に入り込んだと言うニュースが話題になりました。
- (53) 大地は両親を注意させるために自分の成績は大幅に落ちるようにしました。

- (54) 彼は中学生の時のことである。ある日先生に「なぜ勉強しますか」と質問した。
- (55) 無口の性格のせいで会話は上手にできなかった。
- (56) 皆と協力して困難を克服しようと決心している人は多くなった。

上記の例は、本来「が」が使われるところを「は」を使った例である。(51)は「私が行った中学校で」と中学校を修飾する節の中では当然「が」を用いる。後続の節の主語は「男の子」であるため「は」を使えば文末までかかってしまい曖昧になる。しかし「私は卒業した大学で働いている」などは「卒業した」と「働く」が同じ主語なので、「は」が可能である。(52)は引用節の中、(53)は大地という男の子が主語であり、副詞節の中で成績が落ちるということで「が」を使う。(54)は初めに新出の「彼」という情報を「が」で導入し、後続文では「彼は」省略されて文中には表われていないが、実際には文脈の中で取り立てられており、「ある日先生に質問した」と続くわけである。(55)は名詞節の中での主語を表しているため「が」を使う。(55)、(56)は、「～が上手」や「～が多い」などは通常「が」が使われる。「は」を使えば対比の意味として考えられる。従って必ずしも「が」でなければならないことはないが、「が」を「は」に交換すれば、作文者の意識や心情が入ることになり、文の意図も変わってくる。

今回の資料では、「は」を使うべきところに「が」を使った誤用の方が多く見られ、野田他(2001)の調査^(注6)とは反した結果になった。誤って「が」を使用した数は「は」の誤用の4倍であった。

「は」は主体的な判断によって取り立てる場合に使われるが、その使用範囲が広く、絶対条件があげ難いので、学習者にとっては使い方も分かりにくいのではないかと思われる。しかし「が」の使い方は比較的分かりやすい。次のような場合には「が」が使われる。^(注7)

- ① 新しい情報として人物や事物の存在の事実を述べる。「部屋に机があります」
- ② 疑問詞が動作などの主体を表す場合 「何が欲しいですか」「水が欲

しい」

- ③ 比較文の場合。「パンとライスとどちらが良いですか」「パンがいいです」
- ④ 「ば」「たら」「と」「なら」「でも」「のに」などの条件や仮定を表す従属節の中で使われる。「雨が降れば、遠足は中止です」
- ⑤ 連体修飾節や副詞節などの従属節に表される動作や状態の主体が、主文の主体と異なる場合。「雨が降る前に帰りましょう」
- ⑥ 「～は～が文」 いわゆる主題とその部分を提示する場合。「像は鼻が長い」
- ⑦ 対象を提示する場合。感情形容詞（好き、嫌い、懐かしい、欲しい、痛いなど）の対象、能力を表す形容詞（分かる、上手、下手、得意、苦など）や可能動詞の対象、「りんごが好きです」「日本語が上手ですね」「テニスができる」

3-1-6 「は」と「が」の習得と「ゆれ」

作文中の誤用に関しては、個々の作文の添削を行った後で本人に返却をしており、その後重要な点やクラス全員に関わるものに関しては各々の誤用を取り上げてフィードバックを行っている。しかし、それぞれが自由に作文する場合になるとまた誤用が生じる。これは学習者が概念的には一応の規則を理解しているつもりが、作文時の個々のケースはさまざまで、状況が異なるためだと思われる。語学の学習では正用の定着のためには何度も繰り返しの作業が必要である。今回は助詞に関して、特に「は」と「が」の混用が多く見られたため、対象日本語学習者に時期をおいて再度「は」と「が」に限り穴埋め式のテストを行った。また「は」と「が」に関しては個人的な判断によって、いわゆることばの「ゆれ」が観察されるため、同様のテストを日本人学生64名にも行って誤用訂正についての指針とした。

テストは、文中の（ ）の中に「は」、「が」のいずれかを、また、どちらでもよければ「は／が」と記入するという穴埋め形式で行った。例文は前述の(1)～(50)から「ゆれ」が想定される22例を抜き出した。学習者にとっては主

題となる「は」の概念の把握が難しいらしく50%以上が例文の(31), (32), (35), (40), (46), (51)の6文において「が」を再度使用している。どうしてその助詞を選んだかというフォローアップインタビューを数人に行ったところ、「は」と「が」の習得は難しいため、述部が「形容詞」、「分かる、できる」などの可能形の場合は「が」を使うと言う回答であった。確かに上記の例文は述部が「できない」「短くて貴重」「大嫌い」「難しい」「分からない」などである。しかし「は」と「が」の使用はそのように単純に判断できるものではない。「は」の使い方については具体的な指導が必要であり、これは今後の課題である。

日本人学生の場合例(46)と(49)が「は」と「が」の「ゆれ」としてあがった。(46)の「大切な友達を失って、自分()どうなるか分からなくなりました」に「が」を入れた者が60名中32名で、「が／は」を入れたものが17名で、つまり半数以上の53%が「自分がどうなるか分からなくなった」としている。一般的に述部に疑問詞「なに、どこ、だれ、いつ、どう」などがある場合には「これは何ですか」「彼はどこにいますか」「あれはどうなりましたか」など「は」格をとるのが普通である。「どうなるか分からない」の場合は構文上の「ゆれ」というよりもむしろ「は」と「が」の使い分けによる意味の微妙な違いがあることを認識しなければならない。次に(49)の「私が日本に来てからもう一年たちました」も23名の38%が「は」でも「が」でもよいとし、「が」を選んだ者が21名の35%、「は」を記入した者は16名の27%であった。この例も表面上は「ゆれ」として観察された。

3-1-7 その他

その他の助詞の間違いは、単に文法知識の欠如によるもので訂正がしやすい。また助詞抜けは会話ではよく使われるが、文章では必ず適切な箇所に正しい助詞が必要である。初級の段階に助詞の正しい使い方を学習していれば、たとえ誤って誤用が生じても訂正してやれば矯正できる。

- (57) 推薦をもらったのお陰でこの大学に入ることができました。
- (58) 180度の違って、
- (59) 中国では22歳から29世までが結婚適齢期を言われて

(60) 確かに天津では食べ物と中心で有名です。

(57)「推薦をもらったのお陰で」などはよく見られる例で、連体修飾における不要な「の」の挿入である。(58)の場合、助詞は不要である。「180度」を名詞ととれば、「180度も違って」とすることもできるが、「も」を入れるか否かによっては意味の違いも生じる。助詞はそれぞれ機能を持つが、その機能を自在に使って談話の中では話し手は心情を巧みに表すことができるという特典がある。例えば「これは1000円はするね」「えっ、1000円もするんですか」のような使い分けもできるわけである。(59)は引用文の「と」を用いるべきである。「言う」と「思う」は引用の助詞「と」を使用する。(60)は主格の「が」を用い「食べ物が中心」または「食べ物で有名」とするべきところを、両方を合わせた単なる誤用と解釈できる。

3-3 自動詞・他動詞

一般に目的語を取らない動詞を自動詞、目的語を取る動詞を他動詞というが、両者の混同による誤用は、用法、形態の両面において多く見られる。自動詞の場合は主語に「が」格をとるが、他動詞は「を」格で目的語をとる。誤用には、先ずこの「が」と「を」の混用がある。また、自動詞と他動詞の対応は「開ける・開く」、「閉める・閉まる」のように一応形態上の規則があるが、その規則が多すぎて学習者は結局一つ一つ覚えなければならない。ただ、単なる形態上の誤用については規則にしたがって訂正することができる。しかし用法面においては文法的な問題では解決できないものがある。自動詞と他動詞の意味上の区別は、自動詞は、物が主語で、この物の自発的な動きを表し、他動詞は、人が主語で物を対象とし、この物に働きかける動作を表す、と言うのが一般的な理解である。初級学習者には主に形の上での誤用を防ぐことに注目して指導すべきであるが、中・上級学習者になると日本語の奥に潜む日本語独特の要素を身に付けるように指導すべきである。日本語の特徴は自動詞と他動詞の使い分けに顕著に表れている。例えば、実際にお茶を入れた人が「お茶を入れました」と言わずに「お茶が入りました」と言う場合や、例え自分が冷やしておいたにしろ、「冷蔵庫にビールが冷えていま

すよ」と自動詞で言う場合の待遇的表現による心情の違いなどである。しかし下記の例からみると学習者の誤用は殆どが自動詞と他動詞の種類の分別ができていないことに起因している。

- (61) 高校生になった後で、苦しい生活を始めた。
- (62) 哈蜜人民の「一方有難、八方支援」という哈蜜精神はきっと頭に入れるだろう。
- (63) 気に入る女性はなかなか見つけません。
- (64) 正月には家族を揃えることができます。
- (65) 新聞に載せている例から見ると、結婚したくない原因は自分が求める相手がいるからだ。
- (66) そのことは頭の中に浮かべるはずである。
- (67) 人は頑張ってそこで人生の価値が表すのではないかと思います。
- (68) 適当に方言を入れるとコミュニケーションも進みやすいと思います。

(61)から(67)までは自動詞を使うべきところに他動詞を使用している。(61)の「生活を始める」は形容する語彙が不適當だということになる。例えば「苦しい」が別の形容詞か、または「読書三昧の生活を始めた」などと自分の意志でそういう生活を始めたのであれば納得できるが、苦しい生活は好んで始めるものではないので「苦しい生活が始まった」と自動詞を使う方がいい。同じく(62)の「入れる」は他動詞であるから「を」格を使うということから「精神は」ではなく「精神を」と、「は」→「が」の変換のみを訂正するという構文上の問題をクリアしても正文にはならない。自分で努めて頭に入れたとしても、考えや思想は「頭に入れる」はおかしい。では「頭に入れる」は言わないかと言えば「このことは頭に入れておいてください」や「ちゃんと頭に入れておきなさいよ」などと強要する場合に使える。ただ、「頭に入れた」段階で「頭に入った」となり、それからは「頭に入っている」となる。この変化は日本語特有なもので、物事を客観的に、成り行きとしてみる傾向がある。自動詞は自然に「なる」ものについて使い、他動詞には主語の「する」という意志が入っている。(63)の「見つけません」と言えば、自分が主体となり自分の意

志で見つけようとしていないことになる。女性を主題にもってきて「気に入る女性はなかなか見つかりません」が妥当である。「見つかる」は自動詞で「目にとまる」の意味であるが「なかなか」という語がつき、背後に見つけようと努力しているが不可能だという意味が含まれることになる。または、「見つけられません」という他動詞の可能形の否定表現も使えるわけであるが、自動詞を使う方が自然なのは、先ずは物の存在があり、人はその物を客観的に促えるという森羅万象の文化的思考が日本語にも働いているとも言える。例えば、実際に誰かが「迷子を見つけた」場合でも「迷子が見つかった」と言う。それは、視点が迷子にあるので「迷子」を主語に持ってきて「迷子が……」とするのが当然であるという解釈ができよう。しかしそうであれば、「迷子が見つけれられた」と言わないのはなぜか。日本語は自動詞があれば、受身表現よりも好んで自動詞を使う傾向がある。(64), (65), (66), (67)いずれも前後関係から見ると主語の意志が介入していない状況なので「家族が揃う」「新聞に載った例」「頭の中に浮かぶ」「価値が表われる」などのように自動詞を使う方がよい。

自動詞、他動詞の使い方は話し手の視点の置き方によっても異なる。(68)の「適当に方言を入れると」は(62)の「頭に入れた」と同様に他動詞を使えばその動作や事柄を起こした人物に視点がある。つまり、背後に存在する人物が前面に強く出てくるわけで、特にその動作主を表に出す必要がなければ、自動詞を使った方が無難である。例えば「家族を揃える」ようにしたのは背後に主人の命令がある場合、「父は家族全員を揃えて座につける」と言うことが可能かもしれない。但し、「揃える」は主に物に対して使う語彙で「箸を揃える」「靴を揃える」等に使うのが一般的である。これは語彙の問題として取り上げられる。主催者がイベントを企画して新聞社に頼んで記事を書かせた場合は記事を「載せた」と言えるし、また、瞑想の中ではそのことを「頭に浮かべた」という表現が使えるかもしれない。

(69) 私の視野を広がって行って、

(70) 新しい生活を始まりました。

- (71) 授業をもう2週間前から始めました。
- (72) 言葉の音を変わず、漢字だけを変えます。
- (73) 田舎に行ったら、そこで自分の人生を変えるはずです。
- (74) 現実が人々の結婚観を現れていると感じます。
- (75) 昔から人の名前は自分の親または目上の人が決まることになっている。
- (76) 大地は自分の人生が自分で決まりたい。
- (77) 格好のいいものは直ぐに若者の中で広がれる可能性もあります。

(69)～(74)までは、自動詞の使用は正しいが全て自動詞に助詞「を」を使った例である。一般に自動詞に助詞の「を」を使っている誤用が圧倒的に多い。学習者にとっては自動詞と他動詞の区別が分かりにくい。学習者の国の言葉によっては自動詞と他動詞の区別がなく一つの動詞で表されている場合も多いからである。また、「変わる」と「変える」、「決まる」と「決める」のように対応する自動詞と他動詞には発音上かなり似かよっている場合が多く、覚えにくいということも一つの要因となっている。つまり学習者の語彙の範疇には自動詞・他動詞の概念が入りにくいので、いずれか一方の動詞で済ませていると思われる。かなりレベルの高い学習者においても誤用が多いことから、自動詞・他動詞の使い分けができるようになるには時間を要するようだ。実際にはいずれか一方を使っても助詞の使用され間違えなければ意味は通じる場合が多いからである。

(75)と(76)はいずれも人が主語になっており、「〇〇が決める」となり、「決まる」は誤用であるが、これも同じく自・他動詞の混用である。(76)の「決まりたい」の助動詞「たい」は通常意志を表す動詞につき、自動詞にはつかないのが普通である。(77)は明らかに自動詞「広がる」の間違いであり、語彙を正確に覚えていないために正しい形が作れなかった例であるが、「広げる」と言う語彙との混乱も推察される。このような混乱は語彙力がかなりついてからも見られる現象である。

動詞の中には、自動詞・他動詞の両方の用法を持つものがあり、例えば「終わる」は「授業が終わる」は「授業を終わる」と両方可能である。この場合、

形の上では一見助詞「が」と「を」の問題のように見えるが、意味は視点の違いであり、話者が授業と言う事柄か、授業を行っている人物、どちらかに視点を置くかの違いである。「では、授業を終わります」は言えても、「では、授業が終わります」は言えない。前者は授業を行っている人物に視点があり、後者は授業自体に視点がある。前者には授業を行っている人物の意志が「では」という語に表されている。従って学習者はこの隠れている部分を自ら判断し、自分で操作しなければならない。これは、単に文の表面に表れている助詞の問題では解決できない部分がある。また、「終わる」には自・他動詞の両方の意味があるが、「始まる」は自動詞だけであるため(70)、(71)の「～を始まる」と言う誤用が生じる。(69)は「両親や目上の人が決める」と訂正する方がよいが、「名前は両親や目上の人によって決まる」とすることもできる。自動詞を使うか他動詞を使うかの選択は、「始める」は「を」格を取ると言うように構文上の制約で決まっている場合と、(69)の例のように文脈の中で視点が決まり、それに相応しい主語が選択される場合とがある。日本語では、なるべく自動詞を使おうとする。「結婚の日取りを決めました」より「結婚の日取りが決まりました」と言う方がより自然であるが、前者のように主語が特別に文中に表されていない場合の主語は話者である。

3-3 可能形

可能形についての誤用は少数ではあるが必ず生じる問題である。例えば「コンサートには入場券を持っている人しか入らない」という文は、文法的には誤用は表出されていない。しかし、意味・用法を考えた場合には首をかしげたくなる。では、どういう状況の場合にこのような文が使われるのであろうか。下記の例文にも同様なことが言える。

- (78) 結局はいろいろなことに耐えなくて自殺を選びました。
- (79) 皆さん、私の名前を覚えない場合は「〇〇」と呼んでください。
- (80) 一人っ子しか産まない法律がある。
- (81) 「さようなら」と言った時、もう涙を流して声を出さなかった。
- (82) 中学生たちの熱心で素直な顔は、私の日本で一番忘れないことでした。

- (83) ネット上ではお互いに顔も名まえも知らないから、全てを言って自分の悩みを解決するかもしれない。
- (84) しだいに精神的な生活を大切に考えられる。
- (85) 就職問題も考えられなければなりません。
- (86) 結婚しないのは理想的な相手を見つつかれないからだ。
- (87) 18歳の時に大連外国語学院に受けられた。

可能形の間違いも基本的な活用の間違いであれば、それを指摘して訂正が容易にできる。しかし一見して、文法的には正しくて問題はないが、文としてみると不自然で訂正の必要があるものがある。例えば(78)～(83)の述語動詞は普通動詞を使っているが文脈から見ると可能形を使うべきではないか。(78)の例は、自殺を選ぶまでに至った過程にはいろいろなことに耐えることができなかったという事情が含まれている。つまり、耐えようと言う意志があってもそれが不可能であったと言う意味が動詞の可能形の否定形には含まれているのである。可能形は普通は意志動詞にしか作れないことから、同様に、(79)も「覚える」という動詞には意志が入っているため「覚えない」と言う場合には自ら覚えようとしないという意味がある。つまり、覚えようとしたがそれが不可能であったと言うことを表明するためには「覚えられない」と可能形の否定を使う。(80)は、子供を一人以上産みたくても産むことができないのか、それとも産みたくないので産むまいと思っているのか、どちらなのかを判断の上で述語動詞の種類が決まる。(81)においても、声は主語である人物の意志によって出すものであるから「声を出さない」と言えば話し手の意志が表れている。従って何らかの外的な力で声を出すことができなかったことを表明したければ「涙でいっぱいだから声が出せなかった」と可能形の否定形を用いるべきである。「出す」は他動詞で、背後に動作をする人物の存在がある。対応する自動詞の「出る」は物が主語になりうる。(81)の例では、「声が出なかった」と自然の成り行きでそうなったという状況を表すこともできる。「『さようなら』といった時、もう涙が流れて声が出なかった」とする方がもっとも日本語らしい文かもしれない。しかし、誤用を訂正する場合、教育的立場としてはなるべく作文者の原文をそのまま生かす方向に持っていくのがよ

い。3-3でも述べたように学習者は自動詞を使わず、他動詞を使う傾向がある。「さようなら」と言った人物は表には出てきていないが、本文の主語ともなっており、「涙を流して声を出せなかった」と訂正する方が学習者には分かりやすいかも知れない。母語話者ならば「涙が流れて声が出なかった」と自動詞を使うのではないだろうか。(82)も「一番忘れないこと」を「忘れられないこと」と可能形の否定にすれば、忘れようと思っても忘れることができないう意味になり、より豊かな感情表現となる。文脈から察すれば当然可能形を使う箇所である。(83)も然りで「解決する」ではなく「解決できる」となる。(83)の分かりにくい部分は、「全てを言って」にもある。「言って」ではなく、「言えて」と可能形にすれば、「ネット上ではお互いに顔も名まえも知らないから、全てが言えて自分の悩みが解決できるかもしれない」となり、可能形の使用によって文意が伝わるのである。

(84)は可能形の使い方の誤用である。可能形を使う必要はなく「考えるようになる」と、未来においての可能性を表す表現がよい。(85)、(86)、(87)は可能形の作り方の誤用である。

4. おわりに

誤用には、文法的観点から見て明らかに訂正の必要があるものと、少々不自然ではあるが、意味上に支障もなく許容できるので、あえて訂正の必要がないものがある。この判断は訂正する教師に任されているために教師の責任は重い。教育的立場から言えば、学習者の産出した日本語の文は、全文を書き直すのではなく、なるべく原文をそのまま残し、部分的に訂正する方が望ましい。最近は従来の文法重点主義の日本語能力よりも運用能力の方に重点がおかれている。そのために文法規則が軽んじられる懸念があるが、作文においては文法の力が如実に表面に表れるため学習者の日本語レベルの真偽が問われることになる。特に、研究に携わる者にとって日本語力の不足に起因する意味の曖昧さや誤用は致命的なものになるので、細心の注意を払わなければならない。

誤用分析は、近年の日本語研究のために大いなる貢献をしてきた。しかし本来の目的は研究のためではなく、日本語学習者がより自然で正しい日本語が使えるようになるための誤用訂正の手助けとなることであり、そこに発端がある。誤用訂正にあたっては、文脈から論旨を読み取り、的確な判断と納得のいく説明を加えた指示をしなければならない。本論では、主に「は」と「が」の混同について述べた。文法的には「は」と「が」のどちらを使用しても許容される場合が多い。しかし、「は」を使うか「が」を使うかによって文の意味やニュアンスの違いが必ず生じてくる。話し手が発話の背後にある文脈ないし状況をどのように促え、相手にどう伝えるかということが「は」と「が」の使い分けを左右している。日本語の指導においては、文の深層部分にある作文者の思考過程を辿り、その意図を汲み取る作業が要求される。日本語教師は作文者の意図に対してはどちらがより適切かという判断を下す能力、つまり、文法的な知識を超えた、もうひとつ別の日本語作文力の資質も問われるのである。特に最近の傾向として、中・上級の学習者の増加にともない、語彙力、文章力、判断力等に関してのより高度の知識や能力を備えた日本語教師の人材が必要とされるのは間違いない。教師は、常に自分自身の日本語力と幅広い日本語の知識の研鑽のために惜しまぬ努力する必要がある。

現代の本を読まない、文章を書かない時代にあって、メールでコミュニケーションをする若者たちが助詞抜けことばで送信したり、話しているのを聞くにつけ、ことばは生きており、変化しているということは認めるとしても、日本語教育の将来に関していささか危惧せずにはいられない。学習者の多様化に伴い、21世紀の日本語教育及び彼らを指導する日本語教師像は大きく変わっていくだろうということは容易に予想される。「ら抜きことば」を始め、ことばにはどの時代にも「ゆれ」があることは認める。近い将来には「ら抜き」しか使わない時代になっていくのは確実である。もちろん、文法のための文法教育からは脱却しなければならない。また、日本語教師が文法の規範を作ってしまうのも問題ではある。学習者の多様化に対応するという点からも将来の日本語教育は今後大きな課題を抱えていると言える。

注

1. 外国人留学生対象の担当教科「日本語の作文」2002, 2003年度の中国人留学生33名。
2. 母国中国でのみ日本語教育を受け, 来日した中国人留学生の作文であるが, 語彙や表現にはかなり高度の知識を習得しているが文構成においては不自然で理解しにくい例が多い。
3. 市川保子 1997『日本語誤用例文小事典』凡人社 p.202
4. 森田良行 1988『基礎日本語辞典』角川書店 p.920
5. 野田尚史 1996『「は」と「が」』くろしお出版 p.124
6. 野田尚史他 2001『日本語学習者の文法習得』大修館書店 p.127
7. 高見澤孟他 1996『はじめての日本語教育・I』アスク p.105~110

参考文献

1. 寺村秀夫・野田尚史 1985 セルフマスタースシリーズ1『はとが』くろしお出版
2. 水谷信子 1994『実例で学ぶ誤用分析の方法』アルク社
3. 野田尚史 1996『はとが』くろしお出版
4. 高見澤孟他 1996『初めての日本語教育・I』アスク社
5. 市川保子 1997『日本語誤用例文小事典』凡人社
6. 森田良行 1998『基礎日本語辞典』角川書店
7. 野田尚史他 2001『日本語学習者の文法習得』大修館書店
8. 教師用日本語教育ハンドブック③文法1「はとが」くろしお出版